

## 新刊紹介

古賀正義・石川良子 編  
『ひきこもりと家族の社会学』  
(世界思想社, 2018年)

藤間 公太\*

本書は、「ひきこもり」<sup>1)</sup>とその家族への社会構築主義的なアプローチを通じ、「ひきこもり」が家族内部で完結するものではないことを示すことを目的として編まれた書である。これまで、社会保障をはじめとする公的支援の拡充を主張する議論は、主として家族における「福祉の過少」を問題化する形で展開してきた。だが、「ひきこもり」は、家族が福祉を丸抱えできてしまうからこそ生起するものであると考えられる。その意味で、「福祉の過剰」という観点から家族主義の問題にアプローチしている点が、本書の特徴の1つといえる。

本書の構成は次のとおりである。第1章では、新聞や雑誌における言説の分析から、「ひきこもり」の家族に関するイメージの多くが「ひきこもり」当人への対応の文脈で構成されていること、にもかかわらず、家族への支援は残余的なものにとどまっていることが指摘される。第2章では、異なる利害を抱えるエージェントの内外で「ひきこもり」言説が錯綜するなか、種々の実態調査によって「ひきこもり」概念が繰り返し再定義されるとともに、「ひきこもり」の社会問題化と支援の定着が促されたと指摘される。第3章では、概して親たちは「まじめだが内閉的な存在」として「ひきこもり」となったわが子を語り、彼・彼女らが再び社会に包摂されるための実践的な支援を求めること、また、「開示／秘匿」、「過失／援助」という2つの二重性の間で親たちが板挟みになることが論じられる。第4章では、日本社会における

社会的評価原理と養育原理との相互変容によって顕在化したペアレントクラシー状況が親たちを追い詰めていることが論じられ、親子間の「存在論的ペアリング」を緩める必要性が主張される。第5章では、2人の「ひきこもり」当事者の語りから、親子関係の外で自身を語れる場を持つことが重要であること、この知見は、「独立」とは異なる新たな自立と依存の形を考える手がかりを提供するものとして位置づけられることが論じられる。第6章は、山形県における親の会を母体とする4つの支援団体の世話役たちの語りの分析を通じ、「ひきこもり」とその家族の自律を促す、親の会による「弱い支援」の機能について論じられる。第7章では、「ひきこもり」を経験したある一家の「複合的自叙伝」の分析を通じ、「親の生き直し」には肯定的な側面も認められる反面、子どもの「生きづらさ」を取り残したり、「ひきこもり」を家族で解決すべき問題として再定位してしまったりするリスクもあることが指摘される。終章では、「ひきこもり」では声を上げる当事者たちによる問題の確定が重要であったことが指摘されるとともに、「ひきこもり」の若者の社会参加を可能にする支援は当事者の家族と協働して行う必要があること、その際、「ひきこもり」を生まない「健全な教育家族」をステレオタイプ化することの問題を認識することが必要であることが論じられる。

以上のように、本書においては「ひきこもり」とその家族が抱えるさまざまな葛藤が論じられている。従来は福祉の過少の問題の陰に隠れがちで

\* 国立社会保障・人口問題研究所 社会保障応用分析研究部第3室研究員

<sup>1)</sup> 本書序章にならい、以下ではすべてカギ括弧つきの「ひきこもり」という表記に統一する。

あった福祉の過剰の問題にスポットを当てたことで、今後の社会保障について考える上での論点を提示した、広く読まれるべき書であろう。

(とうま・こうた)